

I B（国際バカロレア）の求める「学力」と 日本の大学入試問題が求める「学力」との比較研究

岩崎 充益

The comparison studies of IB and Japanese university
entrance examination in terms of academic ability.

IWASAKI Mitsumasu

Our lives are being altered as a result of the shift from an industrial-based economy to an information-based economy. As a result, the education system must respond to the change.

In the information age, human capital is regarded as a means of estimating value. The expenditure on education represents investment in human capital because it enhances a person's quality of life. Measurement and assessment have to focus on conceptions of twenty-first century skills which include some familiar skills as information processing, reasoning, critical thinking and so on.

We have to alter high-stakes large-scale testing to low-stakes testing so that teachers are encouraged to improve skills not to improve scores. In order to reach this vision, we need every member of our community to be active participants in developing authentic measurement and assessment. This is the comparison studies of IB and Japanese university entrance examination. The IB is now nearly 50 years old and yet this relatively short time, it has gained the respect of the best college and universities in the world.

In this paper, I would like to suggest that IB gives many hints to improve Japanese university entrance examination to assess the twenty-first century skills. In order to sustain my hypothesis, I analyze the comparison of IB and Tokyo university entrance examination.

はじめに

2012年12月、第二次安倍政権が誕生して、「グローバル人材の育成」が教育界に強く要請されている。その言葉の定義するところは、世界で活躍できるグローバル・リーダーや、グローバルな視点をもって地域の活性化を担う人材の育成を意味する。¹

グローバル人材育成の一環として、2013年（平成25年）5月に、教育再生実行会議より「これからの大学教育等の在り方について」の提言があった。その中で、国は、グローバル・リーダーを育成する先進的な高校「スーパーグローバルハイスクール」（仮称）を指定し、外国語、特に英語を使う機会の拡大、幅広い教養や問題解決力等の国際的素養の育成を支援する。

東京都も2020年度（令和2年度）東京都教育委員会の主要事務事業のなかで、グローバルに活躍する人材を育成する教育として次の項目をあげている。

- ・小学校における英語教科化に向けた指導体制の整備
- ・英語「話すこと」の評価を行うスピーキングテストのプレテストに実施
- ・「TOKYO GLOBAL GATEWAY」運営支援
- ・Diverse Link Tokyo Eduの構築
- ・都独自教材「Welcome to Tokyo」の活用
- ・国際交流コンシェルジュの運営
- ・「次世代リーダー育成道場」の実施

本稿の目的は、IB（国際バカロレア）の目指す「学力」と日本の主要な大学入試の求める「学力」との認識の差を分析するものである。

IBは知識偏重とは対極のプログラムである。日本の教育が目指す方向性を示唆している。

1. IB（国際バカロレア）の求める「学力」

1-1 IBの教育理念

IB（国際バカロレア）は1968年、スイス・ジュネーブでNPOとして発足した。もともと国際的な教育環境で学ぶ生徒に大学進学への道を準備する中等教育修了資格を用意する機関であった。

1998年に東京学芸大学の西村俊一他により先行研究がなされている。それによると国際バカロレアの目的として「全人教育」（the education of the whole man）が強調されている。その内容は、

（1）いかなる職業、いかなる全学科専攻にも必要な「道具」の利用法を習得

させる広範な一般教育の必要性

(2) できるだけ柔軟に科目を選択させ、生徒の興味や能力に応えるようにし、同時に均衡のとれた教育を確保させる。

とある。²

IB Mission Statementによると、IBの使命は、「多文化に対する理解と尊敬を通じて、平和的でより良い世界の実現のために貢献する探究心、知識、そして思いやりのある若者を育成する。この目的を達成するために、本機関は世界中の学校、政府そして国際機関と連携し国際教育プログラムの開発と厳正な評価方法開発の念を惜しまない。

本機関は世界中の児童・生徒に対し、行動的で他人に対し洞察心をもち、さらに生涯学び続ける人になるよう働きかける。そうすることにより、児童・生徒は自分とは異なる思想・信条の人々に対しても理解を示すことができるのである。」と書かれている。

IBの教育理念として西洋型エリート教育というより、国際的標準知(global competency)の獲得と世界のリーダーとなるべき人材の育成を主眼としている。

教育再生会議の提言を受け文部科学省は、一部日本語で教える国際バカロレアプログラム(日本語DP)の開発、導入を進め2018年までに推進校を200校指定すると発表した。

IBの学習者像は「探求する人」(Inquirers)、「知識を求める人」(Knowledgeable)、「深く考える人」(Thinker)、「コミュニケーション能力のある人」(Communicators)、「信念を持つ人」(Principled)、「狭い考えにとらわれず心が広い人」(Open-minded)、「思いやりのある人」(Caring)、「挑戦者」(Risk-takers)、「バランス感覚のある人」(Balanced)、「思慮深い人」(Reflective)、とある。

世界約150カ国、3,665校がスイスに本部を置くIB機構によって認定校にされている。日本の学校卒業資格の得られる1条校(学校教育法第1条に規定されている学校)のうち認定校は6校である。

1-2 IBの求める「学力」

IBが求める「学力」は国際標準知である。国際標準知は「21世紀型能力(twenty-first century skill)」とも言い換えることができる。この能力はIBが準備する「国際教育プログラム」を通じて身につけられる。IBは「国際教

育プログラム」の概要を次のように記している。

- ・異なる文化、言語、信条の人々が共存できる地球市民の育成。
- ・自分の属する国に対するアイデンティティそれに自国文化を意識する態度の涵養。
- ・世界中の人々に対する普遍的な愛を育み、それに対する理解力の涵養。
- ・学びにたいする喜び、発見に対する喜びの気持ちを高めるための好奇心、探究心を涵養させる。
- ・あらゆる分野、領域にわたり、グループ、あるいは個人で知識の探求をすすめることの出来るスキルを身につける。
- ・自分の属する国で必要な理論や知的関心を求め、世界中に共通する普遍的な知を提供する。
- ・教育現場での多様な教授法、柔軟な教授法を勧奨する。
- ・国際水準の評価規準を提示する。

I Bは生涯を通じ教えることの連続性、一貫性を強調している。国際バカロレアが施しているカリキュラムを紹介する。

- ・初等教育プログラム（PYP）3歳～12歳、全人教育
- ・中等教育プログラム（MYP）11歳～16歳、5年間、高度な教育内容と生きる力（スキル）を育成
- ・ディプロマ資格プログラム（DP）16歳～19歳、2年間、大学入試直前プログラム
- ・I Bキャリア関連教育サーティフィケート（IBCC）16歳～19歳、2年間、キャリア関連学習

3歳から連続してI Bの教育プログラムを学ぶことでI Bの教育理念が達成できると言う。生涯学び続けることが原則である。ただし、認定校においては、このプログラムのどれかを選択すればいい。

その教育理念の柱は全人教育（the education of the whole person）である。学びを通じて知力、人格、情緒の安定を身につけ、社会人としての成長を期している。

I B（国際バカロレア）の求める「学力」は、単なる受身の知識ではなく、クリティカルシンキング（critical and creative thought）を通じて身につけた知識を小論文の形で論述させる力を測っている。

2019年度まで実施されてきたセンター試験のように膨大な引用文を読み、五肢択一の記号で解答する形式の対極にある。自分自身が身につけた知識を自分

の中で思想化しそれを論述させる総合的文章表現力を見ようとしている。

記述式試験の採点の公正さを維持することは難しい。その点、I Bは詳細な採点基準が明示されている。後ほど採点基準については紹介したい。

1-3 I Bの教育課程

教育課程の構造は、「国際バカロレア規約」(General Regulations)の第2条に規定されている。概要は以下の通りである。

A 6科目の概要

- (1) 語学A（第一言語） 世界文学を含む
- (2) 語学B（外国語）言語修得法、または別の語学A
- (3) 人間学（次の中から1科目選択） 哲学、心理学、社会人類学、歴史学、地理学、経済学、組織学
- (4) 実験科学（次の中から1科目選択） 生物学、コンピューター科学、化学、デザイン工学、環境システムと社会
- (5) 数学 数学の計算、数学研究、高等数学、コンピューター科学
- (6) 選択科目
 - (a) 芸術科目 ダンス、音楽、映画、劇、ビジュアルアーツ
 - (b) 上記グループ1～5の科目の中から1科目選択

B その他の科目

- (1) 6科目の中から1科目を選び、研究を進め4000語以内の論文を完成する。
- (2) TOK「知識の理論」(Theory of Knowledge)
- (3) CAS (Creativity, Action, Service) スポーツ活動、奉仕活動

「知識の理論」はI Bの教育課程の中で特徴的な科目の一つである。「知識の理論」はフランスのパカロレア試験の必修科目である「哲学」をベースに考案された。日本の後期中等教育では選択科目が多く、専門の教科にばかり特化した学習になりがちである。その対極にあるのが「知識の理論」である。教科横断的に知識を身につけることが要求される。

「知識の理論」では「どのようにその知識を獲得したらいいのか？」(How do we know?)、が常に問われる。いわば「探求型」授業である。

教育課程の中で「知識の演繹的な性質」(interpretative nature of knowledge)を学ぶ時間として位置づけられている。

1－4 I Bの問題分析

では実際にどのような問題文が出題されているのであろうか。ここでは、ディプロマ資格プログラム（DP）の「世界史」の問題を分析してみる。分析は東京都教育庁指導部、篠田直樹特任教授にお願いした。

問題文：（時間は60分）

「中国の朝貢システムと西洋列強の貿易、政治、外交代表権、市民権に関する要求は相容れない。あなたは、1793年から1839年までの中国と西欧の力との間の相互作用に関するこの評価にどの程度賛成できるか論述せよ。³」

「問題原文：“The Chinese tribute system and the western powers demands for trade, diplomatic representation and the rights of their citizens were incompatible.” To what extend do you agree with this assessment of the interaction between China and the Western powers during the period 1793 to 1839?」

解説：

受験生はまずは中国の「朝貢システム」について論述するだろう。その後、西洋の貿易、政治、外交代表権、市民権に関する要求について論述するだろう。受験生は中国と西欧の間の様々な相違の理由と考える内容を明らかにし、2つの文化間の相互理解が完全に欠如していたことを論述する。具体的には、キリスト教に対置される儒教と仏教、外交関係を樹立したいと望む西洋とは対照的な「朝貢システム」による国際関係、「広東システム」（＊国家による管理貿易）による貿易と西欧の自由貿易観、集団の責任を強調する中国の法システムと潔白と罪の意識は個人の範疇であるとする西洋の考え方、科学と技術面の相違などである。受験生はこれらの論点を与えられた時間枠の中で比較・対照しなければならない。また、「朝貢システム」の組織、マッカトニー（1973）、アーマスト（1816）、ネイピア（1834）の交易使節団、アヘン貿易とその中国への影響、林則徐のアヘン貿易禁止への試みと西欧の反応、エリオット船長の行動、1839年の林喜維の事件と第一次アヘン戦争の開始などのような特定の詳細事項に関連して、処理しなくてはならない。

I Bが公表している採点基準は以下の通りである。

採点基準：

【0点から8点】

1793年から1839年までの中国と西洋パワーとの間の相互作用に関する知識がほとんどないか不適切な知識しかない。解答が根拠のない一般化、不正確、逸

話風、的外れの論評を含んでいる。

【9点から11点】

このレベルの解答は、1793年から1839年までの時期の歴史的事象に関する叙述的な説明、あるいは中国の「朝貢システム」とイギリスの貿易使節の記述である。答えはバランスが欠けており、暗黙のあるいは未成熟な論点となっている。

【12点から17点】

問題に対し明確な焦点が当てられている。この点数層の再下位レベルの解答は、なぜ2つの文化が両立・調和できないかということの理由を十分に分析するよりも、アヘン戦争の原因に必要な以上の力点をおく。この点数層のトップ層の答えは文化的、外交的、法的、経済的な論点面を与えられた時間枠の中に処理する分析的な、バランスのとれたものになっている。

【18点から20点】

このレベルの小論文は、この時代の中国と西洋パワーの間の相互作用に影響を与えた、広範な一連の文化的、外交的、法的、経済的、技術的要素への特別な次元の洞察力をもっている。受験生は問題文の設問文の主張に挑戦し、歴史的学上の観点を議論できるはずである。

ちなみに、D Pの取得要件はC A Sを修了し、T O KとExtended Essayの評価が「D」以上必要である。更に、Higher Level教科の合計点が12点以上、Higher Level教科で「2」以下でないことと、Standard Level教科でも「2」がないことが条件となる。

このレベルのDiplomaを修得できる日本の高校生はどのくらいの学力レベルであろうか。西洋史を専門とする教育庁指導部所属の篠田直樹特任教授に確認すると、難関国立大学入試レベルかそれ以上との解答を得た。次に、日本の大学入試問題を分析してみよう。

2. 日本の大学入試問題が求める「学力」

2-1 日本の大学入試問題「世界史」分析

2012年度（平成24年度）度東京大学「世界史」の入試問題を分析してみよう。

同じく篠田直樹特任教授の分析を依頼した。

問題：

第 1 問

ヨーロッパ列強により植民地化されたアジア・アフリカの諸地域では、20 世紀にはいと民族主義(国民主義)の運動が高まり、第一次世界大戦後、ついで第二次世界大戦後に、その多くが独立を達成する。しかしその後も旧宗主国(旧植民地本国)への経済的従属や、同化政策のもたらした旧宗主国との文化的結びつき、また旧植民地からの移民増加による旧宗主国内の社会問題など、植民地主義の遺産は、現在まで長い影を落としている。植民地独立の過程とその後の展開は、ヨーロッパ諸国それぞれの植民地政策の差異に加えて、社会主義や宗教運動などの影響も受けつつ、地域により異なる様相を呈する。

以上の点に留意し、地域ごとの差異を考えながら、アジア・アフリカにおける植民地独立の過程とその後の動向を論じなさい。解答は解答欄(イ)に 18 行以内で記し、必ず次の 8 つの語句を一度は用いて、その語句に下線を付しなさい。

カシミール紛争

ディエンビエンフー

スエズ運河国有化

アルジェリア戦争

ワフド党

ドイモイ

非暴力・不服従

宗教的標章法(注)

この問題を解く上の必要とされる知識として

- 1) 指定語句の基本的事項を時間軸・空間軸の中で理解し、知識として定着させる。それらの知識を基に、各国の植民地化・民族独立の特徴とそれがもたらす現状と課題の全体像を描ける分析的思考力およびこれを540字以内にまとめる論理的表現力が必要である。
- 2) 東京大学の「高等学校段階で身につけてほしいこと」の中で「・・・能動的で創造的な思考力は・・・新聞やテレビなどで報じられる現代の事象への関心や、読書によって養われる社会や歴史に対する想像力を通じて形成されます。」と述べられているように、宗教・文化摩擦は重要な現代的課題である、東京大学を目指す生徒ならば押さえて置きたい。⁴

このような「総合的な知識」を踏まえた「分析的思考力」、「論理的表現力」を的確に測る目的で、毎年、第1問では指定語を用いて、複数の地域・時代にまたがる大論述問題が出題されている。「指定語」は一部注釈が付されたものを除き、すべて教科書レベルの内容であるが、同じ題材でも、これらの知識を関連付けて理解し（＝分析的思考力）、思考を論理的に論述する力（＝論理的表現力）が問われる点で難易度は高い。

ちなみに、河合塾の中村哲郎は東大の世界史の傾向として、

- ・空間軸を問う
- ・歴史展開を問う
- ・相互の関係を訊く
- ・相違点・共通点を訊く
- ・指定語を8つか9つ使って答えさせる。

と話している。

こうした入試問題に相對するためには知識の単なる集積では齒がたたない。過去の知識を疑いながら分析的に本を読み、論理的な文を書く力が要求される。これはI Bの「知識の理論」で求められる学力に近い。I Bに対応した理想の教育課程はクリティカルシンキング（critical and creative thought）を主眼としたカリキュラムである。

2012年度（平成24年度）のセンター試験（世界史）の問題を見てみよう。

問2 下線部②について述べた次の文章中の空欄 と に入れる語の組合せとして最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

海上ルートを使ったムスリム商人は、東南アジアを経て、中国南部の や泉州にまで至るようになった。彼らは などを求めて東南アジアへ、陶磁器などを求めて中国へ進出した。

- ① アー広州 イーガラス器
- ② アー広州 イー香辛料
- ③ アー長安 イーガラス器
- ④ アー長安 イー香辛料

この手の問題には知識を暗記することで十分対処できる。I B（国際バカロレア）の求める「学力」と大きな違いがある。

I Bが想定している学力とは知識量の多寡ではなく、学校で身につけた知識を社会生活の中でいかに活用していくか、問題解決能力、探求心などをさしている。

学習スタイルには次の二つがある。

ア 習得スタイル：授業→復習→予習（授業に戻る）

イ 探求スタイル：授業→追求・探求→表現（授業に戻る）

日本の教育現場では習得スタイルに重点を置かれた教育が綿々と積み重ねられて来た。

探求スタイルを最初に提唱したのはアメリカのJohn Deweyである。彼が提案したinquiry-based learning（探求法）の教育効果として、生徒のクリティカルシンキングの養成、問題解決能力の伸長がある。

I B導入によって、今までの教育スタイルを否定するものではない。学びのパラダイムを変換する必要がある。

3. 日本の大学入試問題の変遷（外国語）

3-1 東京大学の英文和訳問題の変遷

東大の英語入試問題はどのように変遷してきたか概観してみたい。特徴的な変化は英文和訳問題である。英文和訳問題のみ取り上げてみたい。1972年から最近の東大入試問題までを比較してみる。

1972年度（4B）

次の文の下線をどこした部分を日本語に訳せ。

Robert: You haven't changed a bit in these ten years, Caroline.

Caroline: I'm afraid that's only your fancy. You've seen me almost every day since we first met, and you naturally wouldn't notice any difference in me.

Robert: That's true. In a way it's been a wonderful ten years, Caroline. We've found constant amusement in one another's society. You've been a great help to me.

Caroline: You've been a dear, Robert. You've always been so kind and patient.

Robert: (1) It certainly hasn't been hard to be either.

Caroline: (2) And you never forget the little anniversaries that men find a bore to remember, but that women think so much of. You never fail to send me a little present on my birthday, Robert.

解説：平易な会話文である。現代の英検で準1級程度か。受験生の英語でのコミュニケーション能力を見たいとするアドミッションポリシーがうかがわれる。

1980年度 4B

次の文の下線をほどこした部分を日本語に訳せ。

In general, we do not like to be told either what we already know or what we are unlikely ever to know well or to good effect. We do not read books if we are already thoroughly familiar with the material or if it is so completely unfamiliar that it is likely to remain so. We read books which help us say things we are on the verge of saying anyway but cannot quite say without help. We understand the author, although we could not have formulated what we understand before he put it into words.

解説：知識量の多寡を競うのではなく自分が身につけた知識を自分の言葉で発出できるかいなか、いわばクリティカルシンキングを問う内容の英文である。東大もこの頃からI Bの教育理念を意識していく。

1985年度 4B

次の文の下線をほどこした部分を日本語に訳せ。

TV is more suitable for family entertainment than the radio, precisely because it makes so few demands, leaving one with plenty of attention to give to the noisy grandchild or talkative aunt. If the programmes required greater concentration, one would resent the distractions which inevitably attend the family circle. The less demanding the programme, therefore, the more outgoing and sociable everyone is, which makes for a better time for all concerned.

解説：テレビ、インターネットなどが普及し、思考の手段が受け身になっているこの時代の風潮に警告を発する出題である。テレビ番組の俗化に対する警告でもある。

1990年度 4B

次の英文の下線部を和訳せよ。

Emotions are everywhere the same; but the artistic expression of them varies from age to age and from one country to another. We are brought

up to accept the conventions current in the society into which we are born. This sort of art, we learn in childhood, is meant to excite laughter, that to provoke our tears. Such conventions vary with great rapidity, even in the same country.

解説：感情表現が抑えられているこの時代にとって、喜怒哀楽を思いきり表出する生き方に価値観を持たせている文である。

1995年度 1 (A)

英 語

- 1 (A) 次の英文の内容を 60 字～70 字の日本語に要約せよ。ただし、句読点も字数に数える。

Traditional grammar was developed on the basis of Greek and Latin, and it was subsequently applied, with minimal modifications and often uncritically, to the description of a large number of other languages. But there are many languages which, in certain respects at least, are strikingly different in structure from Latin, Greek and the more familiar languages of Europe such as French, English and German. One of the principal aims of modern linguistics has therefore been to construct a theory of grammar which is more general than the traditional theory — one that is appropriate for the description of all human languages and is not biased in favor of those languages which are similar in their grammatical structure to Greek and Latin.

解説：この頃から長文を読み、要約する力が求められる。後期中等教育の英語の授業も逐語訳から段落をざっくり読み要約する授業に変わっていく。

2005年度 2 (A)

2 (A) 下の絵に描かれた状況を自由に解釈し、30～40 語の英語で説明せよ。



解説：絵の内容を自由な発想で自分の英語力を駆使して描く力が求められる。
自由な発想力が求められる。

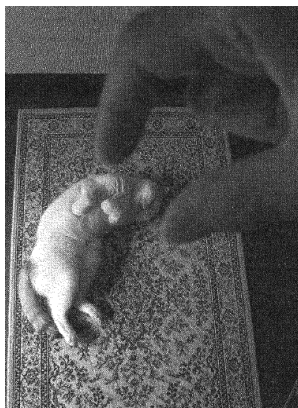
3-2 自由記述式問題への変遷

2000年度頃の入試問題から顕著な変化がみられる。2016年度の大問2Aで次のような出題が出題されている。

2016年度 2A

問題 2 A 下の画像について、
あなたの思うことを述べよ。全体で60～80語の
英語で答えること。

「実物は画質の悪いモノクロ写真。いったい
なんだか判別できないが、生き物を、指でつまも
うとしているように見える写真だ」



【解答例】（著者作成）

This photo was taken using my smartphone. I happened to find my cat sleeping on the carpet, so I wanted to make a funny photo and send it to my friend. By focusing on my fingers far above the cat, I tried to emphasize the big contrast between my fingers and the object, a sleeping cat. The photo turns out to be as if a tiny cat were being picked up by huge fingers. I am sure my friend will like it. (80字)

【解説】

（１） 出題の傾向・意図等

自由な発想のもとで自由な内容の英作文が出来る力を見る良問である。常日頃から何通りもの英語の構文を暗記して、沢山の引き出しを準備しておく事。

（２） 前年度入試問題との比較等

2015年度も、写真を見て、自由な発想で英文を作成する問題が出題された。正答がない問題である。受験生の自由な発想と英語のコミュニケーション能力をみている。

（３） 必要とされる知識・技能及び思考力・表現力等

常日頃からあらゆるメディアを駆使し英語表現に接している必要がある。英語のニュースや映画などからこれという面白い口語表現があったらメモして暗記しておくとうoutputの幅は大きく広がる。全般的に次のような知識が要求される。

- ・限られた時間内に正確に英文を読みこなす力。
- ・主題と文脈を理解しながら、各段落の要旨を正確につかむ読解力。
- ・段落ごとのつながりを見失うことなく、文全体の構成を理解できる力。
- ・語彙力に読解力を加味した問題である。

テーマに関して首尾一貫した論を展開しないと高得点はもらえない。

（４） 指導上の取り扱い及び留意点

オーラルコミュニケーションの授業でこうした形式の問題に慣れておく必要がある。英語表現の授業で70字から80字くらいの長さの英文を書く練習も効果的である。難し過ぎる表現やbookishな英語を使わず、自分の知っている確実な英語表現を使うこと。outputの幅を広げるべく常日頃から会話表現集などコツコツと集めておくこと。

反転学習（flipped classroom）の授業で、ある主題を自学自習の課題として家でやってきて、教室では3名位のグループで発表させる。協働作業の中によ

り良い英語表現あるいは奇抜な発想をお互い学ぶことも効果的である。

いろいろなテーマで自由英作文を書き、ALTかJETに添削をしてもらい、その上で日本の教師が再度添削するとよい。

英語科だけの指導では対応できない。教科横断的な取組が必要となる。「英語表現」の授業などで文法上正しく、論理的で説得力のある英文構成法を学ぶことは可能である。空き時間を見つけ幅広いジャンルの読み物に接する必要がある。日本語で古代教養を含めた内容の書籍を読ませることも大切である。

（５） 類題

写真や図を見て自由英作文をさせる問題は他の大学ではほとんど見受けられない。情景描写を英語で表現させるこの手の問題は東大独自の問題になりつつある。

（６） 総評

学校教育法では「学力」に関して次のように定義されている。第30条2項に「基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養う」自分から課題を見つけ、日常の学習活動から身に付けた知識を活用し自分の考えを主体的に表出する力をつけるいわゆるアクティブラーニングの実践が必要である。

入試問題に東京大学のアドミッションポリシーが表われている。東京大学では以下のような能力の学生を取りたいのだろう。

- （１） 高度な基礎学力＋専門知識
- （２） 幅広いグローバル教養を基礎とした洞察力
- （３） アクチュアルな課題に対する実践的問題解決力

この頃から東大の問題は何を問おうとしているのか、少し見ただけでは分からない。少ないヒントを頼りに、自分の力で問を立てる力を求められる。問題解決型学力が求められる。

4. 21世紀を生きる新しい「学力」とは

4－1 国際標準知（Global Competency）とは

21世紀を生きる新しい「学力」を語るとき、いま学校現場で学んでいる児童・生徒が社会に出て活躍する2030年から2040年の社会を概観しておこう。その頃の社会は次のようになるだろう。

・知識・情報・技術をめぐる変化が加速度的になる。

- ・第4次産業革命が訪れる。第4次産業革命とは進化した人工知能が様々な判断をする。AIが人間の職業を奪う可能性がある。
- ・予測困難な時代になる。
- ・モノを売る時代から、価値を売る時代へと変わる。

こうした社会を生き抜くには国際標準知（Global Competency）が必要となる。国際標準知についてはOECD教育・スキル局長のアンドレアス・シュライヒャーは次のように定義する。

「フェイクニュースやポスト真実（post truth）の時代にあって、同じ考えの人が固まり、文化構造を生み出している。あふれるインターネットの情報から何が真実であるかを判断する建設的知識、考えの違った人たちとつながり一緒に働く技能を問う力」

2015年頃から東大の入試問題は大きく変わってきた。知識を問うのではなく、知識を活用した上で、分析力、課題発見力が問われるようになった。

2014年（平成26年）12月22日、中央教育審議会が「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の在り方」と題する答申を発表している。その中身は、

「知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向け探求して、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力を中心に評価する」

この答申の中で「合教科・科目型」「総合型」と各教科を分類している。回答方式は「記述式」を導入することが推奨されている。成績提供に関しては「段階別表示」を用い、英語の4技能を評価できる民間の資格・検定試験の導入を提案している。

多分にPISA型学力を意識した答申になっている。PISAの読解力は次のように定義されている。

「literacy:concept concerned with the capacity of students to analyse, reason and communicate effectively as they pose, solve and interpret problems in a variety of subject matter areas」DeSeCo

「読解力とは、生徒がある命題に面した時分析力、推論する力、誤解なく伝達する力を駆使し、様々な命題を解明し理解する力のことである」（著者訳）

数学的リテラシーの定義は「数学を適用し、解釈する個人の能力、数学的に推論する力、数学的な概念・手順・ツールを使って事象を記述し予測する力」となっている。

科学的リテラシーとは「科学的な事象を説明し、科学に関連する諸問題について証拠に基づいた結論を導き出すための科学的知識とその活用」と定義でき

る。

PISAの結果に一喜一憂することはPISA本来の主旨とかけ離れている。PISAは「教育政策」の通知表と理解できる。各国の教育制度がきちんと狙い通りに実現されているかreviewするもので、数値で見える定量的なものではなく、数値で見えない定性的なものを考慮している。

PISAのリテラシーの特徴は「応用力」「活用力」「クリティカルリーディング」を意味し、語源はLiterateからきている。たとえば15世紀に登場したシェークスピアの戯曲を読んで楽しむことができる「高い教養」の意味になる。

アメリカのNAEP（National Assessment of Education Progress）はリテラシーの定義として「社会で機能するため、個人の目標を成し遂げるため、そして自分の知識や可能性を発達させるために、印刷され書かれた情報を活用すること」としている。

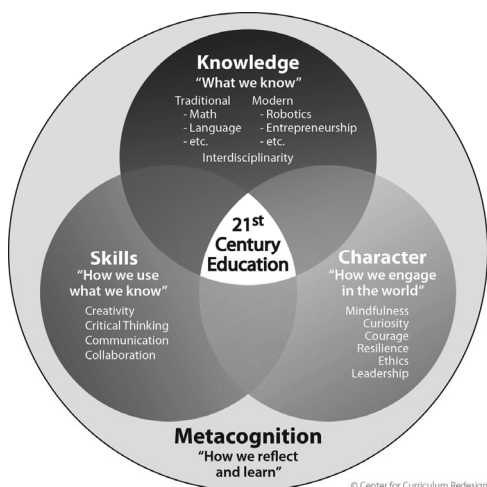
私はここでさらに発展させ、リテラシーとは「知識の概念化」と定義したい。身に付けた知識を自分の心の中で概念化し、他者に誤解なく、論理的に伝える力はリテラシーである。リテラシーを身に付けるためあらゆるジャンルの文献にあたる、それもむさぼるように読むのである。

リテラシーの概念とともに近年ではコンピテンシーという語が登場する。次にコンピテンシーの定義について言及したい。

4-2 コンピテンシーとは

学びに対する世界のトレンドは

- ①「何を知っているか」「何ができるか」「どのような問題解決ができるか」といった知識ならびに技能。
- ②「知っていること、できることをどう使うか」つまり、思考力、判断力、表現力。
- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」つまり、学びに向かう力、人間性である。



新学習指導要領の「学力の3要素」も同じ学びの方向性を示している。

こうした方向性の礎となったのがDeSeCo (Difinition and Slection of Competences) のプロジェクトである。DeSeCoはグローバルゼーションが加速する世界で国際的に共通する資質・能力であるkey competencyを定義した。

CompetenceあるいはCompetencyの定義についてRobert WhiteはContent-Based Lerning（領域固有の知識技能）と Competecy-Based Learning（その知識を使って何が出来るか）という二つの概念で説明している。

知識を集積し、その知識を使って入試問題を解く流れから、その知識を使って自分の考えを論理的にアウトプットする力が求められる。最近の入試問題の傾向はこの方向にある。

Key competencyという概念をアメリカでは21st century skillsという語で表す。

図1はそれぞれの概念を対比したものである。次に21st century skillsについて言及したい。

	対象世界との対話	他者との対話	自己との対話
	認知的側面	社会的側面	情意的側面
Key competency OECD DeSeCo	道具を相互作用的に用いる	思想。信条が自分と異なる人と付き合う	自立的に行動する
21century competency	認知的コンピテンシー	対人的コンピテンシー	自己内コンピテンシー

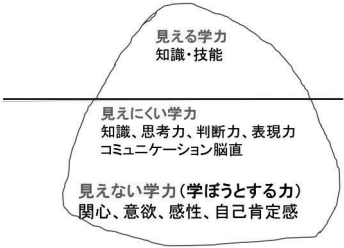
図 1

4－3 21世紀型スキルとは

21世紀型スキルの要の一つにメタ認知能力という概念がある。学力には見える学力と見えない学力さらに非認知能力といわれる学ぼうとする力がある。氷山に例えると見える学力は水面上にある。水面下に見えない学力、さらにその下に非認知能力がある。

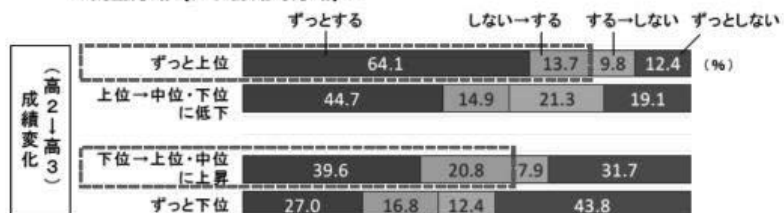
メタ認知能力が成績を伸ばすことは模試の分析結果で実証されている。図1－1のデータはベネッセによる測定結果である。

偏差値の壁があり、ある一定の偏差値以上の生徒は間違えた問題を解きなおすことにより成績を向上させている。



問題を解きなおすことにより、メタ認知能力を駆使していると考えられる。

図 1-1 「テストで間違えた問題をやり直す」(高2→高3の変化)
 <調整方略(メタ認知的方略)>



メタ認知能力とは、自分の学習過程をもう一人の自分が心の窓を通してみること。オンライン・モニタリングである。

メタ知識というのは「自分が知っていることを知っている、その知識を使って何ができるかに関する知識」である。自分でしっかり学習計画をたてられる子はメタ認知能力が高い。

メタ認知とは

- ・ Knowledge monitoring ability (能力を監視する知識)
- ・ Knowledge about knowing (知っていることを知っている)
- ・ cognition about cognition (認知していることを認知している)
- ・ understanding what I understand (自分の理解していることを理解する)

21世紀型スキルの中でメタ認知とともに重要な能力にreflection（内省）がある。成績が伸びた生徒を分析すると、

- ・ 出来るようになった事柄を記録に残す。
- ・ 自分なりに課題を設定し調べる（探究）。
- ・ 分からないことがあっても諦めない。
- ・ 模試などなぜ間違えたか自問自答する。
- ・ 学校行事で、部活動で自分はどう変容したか記録する。

こうした能力は内省といわれる。新しい能力観、つまりメリトクラシーの変遷を見てみよう。

中村高康は前近代から後期近代にかけ日本のメリトクラシーがどのように変遷してきたかを図にまとめている。

大学入試問題の変遷を知るうえで参考になる。これからの大学入試はどのよ

うに変遷していくであろうか、次に概観してみたい。

メリトクラシーの変遷			
	前近代 pre-modern	前期近代 early-modern	後期近代 late-modern
おおよそ対応する年代	～1860年代	1860～1960年代	1960年代～現代
対応する制度や現象	身分制 世代間移動の固定化 世襲	学歴身分制・学園 指定校制 筆記試験 学校への信頼	競争的昇進制度 偏差値・通塾 新しい能力論の台頭 潜在学力主義、自己啓発 学校、大学評価 学歴批判 自由応募制 推薦入学・調査書選抜
教育制度の例	寺子屋・藩校	義務教育の定義 中等教育の拡大 エリート高等教育	中等教育の普遍化 マス、ユニバーサル化 高等教育
情報化の進展状況	ローカル	ナショナル	グローバル
代表的情報通信手段の例	手紙・伝聞	新聞・固定電話 テレビ・ラジオ	コンピューター・携帯 電話 電子メール・インター ネット・衛星通信

参考資料：『暴走する能力主義』
中村高康

4－4 日本における大学入試改革の意義

今回の大学入試改革はAI時代の教育の方向性から必然的に生まれてきた。AIの時代には公正に個別最適化された学びになる。すべての子供がすべての段階で他の子供と協働し自ら考え抜く自律した学びである。

基礎読解力、数学的思考力が求められる。文理分断からの脱出である。

大学入試改革の意図するところは、

- ・高校までの勉強感と大学の学習感との断絶があり、受験勉強は大学入学の手段となっていた従来の学びから脱却し、その断絶の解消である。
- ・受験生が暗記している知識量を使って何ができるかを知ることが真正な選抜試験となる。
- ・後期中等教育は「21世紀スキル」「21世紀能力」の育成を主眼とする必要がある。
- ・評価方法を変えることで後期中等教育の学びの形を変えていく。

21世紀型スキルを身に着けるためには学びの形を根本的に変える必要がある。そこで必要性が叫ばれるようになったのは「主体的・対話的で深い学び」いわゆるアクティブラーニングである。アクティブラーニングはなぜ必要か明記すると、

- ・「グーグルは何でも知っている」といわれるように知識量の多寡でその人の能力を知る時代からその知識を使って何ができるかを知る時代になる。
- ・鶴見俊輔によると、明治時代に入って日本人が失ったものの一つに傾聴、聞く力がある。ただ聞くだけではなく、心の中で自分自身と対話しながら聞く。
- ・深い学びの必要性が認識されてきた。児童生徒が他者と関わりながら、対象の世界を深く学び、自分のこれまで身に付けてきた知識や経験と結び付け新たな発見へと結び付けていく。

「伝統的学び」から「問題解決型学び」「探求型学び」へと学びの形はシフトしている。

4-5 「探求」が学びの要になる

後期中等教育では大学が求めるアドミッションポリシーに謳われている資質・能力を意識した授業を展開する必要がある。その授業の要は「探求」である。一部の私学では探求をセールスポイントにしている。探求型の授業がこれからの学びの姿となる。「探求」の目標はメタ認知つまり「内省」である。

「探求」学習の要点は問を立てる力である。探求はテーマをしっかりと定義することから始まる。テーマがきまったら教科横断的にそのテーマを追求する。情報は文献にあたること、グーグルはカテゴライズされているので真真正正なデータは得られない。

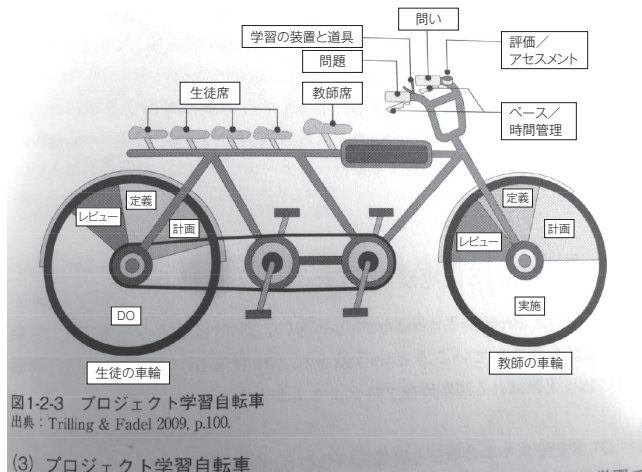
2020年度から実施される総合型選抜、学校推薦型選抜では高校生が在学中どのようなテーマでどのような手段でそのテーマを追求し、自分がどのように変容したか問われる。結果の質より学習過程を重視する。ちなみに滋賀県の膳所高校ではグアム大学で課題研究を英語で発表しそれが学園祭とならぶ最高行事となっている。

東京大学、京都大学では推薦入試の求める要件として、総合型探求の時間に何を課題として設定し、探求を通し生徒がどのように変容したか成果物をポートフォリオなどの記述から見るとすでに発表している。

探求学習、内省、メタ認知能力など21世紀型スキルの育成には学びの形を変革しなければならない。

右の図はTrilling and Fadel (2009) が発表したプロジェクト学習自転車である。

教師は運転はするが、生徒と同乗者である。21世紀型スキルを育てるために教師は効果的な「問いかけ」が必要になる。仮説をたて、検証し授業を変えていく



仮説検証型の授業が求められる。仮説をたてる力はAIにない能力である。⁵

評価を変えなければ学びの姿は変わらない。多面的評価の導入が叫ばれる。多面的評価の目的は、

- ・より深い学びになっているか捉える。
- ・各教科評価には「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点で行う。
- ・定期試験などの総括的評価のみならず形成的評価も行うことで、授業は活性化する。
- ・教師からの評価だけでなく自らの自己評価も行う。
- ・友達同士の評価も入れる。

授業の終わり、学期の終わりに必ず「内省」をいれる。

このプロジェクト学習自転車の重要な箇所はフレームである。教師と児童生徒が協力してプロジェクト全体を組み立てていくことを表している。ハンドルはテーマが正しい方向に向かっているか操縦するもので「問いかけ」「評価」「学習環境」などの要素が含まれる。学期最後に検証をし、次の学びにつなげていく。

5. 英語民間試験の延期について

2020年秋、大学入試の英語試験について議論していた「文化と邂逅と言語」

分科会は提言で「書く」「話す」力は各大学が必要に応じて図るように提案し民間試験の活用も大学の判断にゆだねるよう求めた。⁶

2019年11月1日、英語民間の活用が延期になった。その1か月後、今度は国語、数学の記述式問題も延期になった。

延期の理由は受験生にとって公平性が担保できないという点、それに真正な試験問題と公正な採点ができないだろうという点に集約できる。

私は都立高校の校長を退職しこの十年間都立高校を回り、英語教員に日本における教育の枠組みが大きく変わる、新学習指導要領の育成しようとする力は世界共通の向うべき方向である、今の高校生が大人になる2030年にむけ、日本を成熟した民主主義国家にすべく、あらゆる人種、思想・信条の人びとと付き合う事が出来る人材育成は喫緊の課題である、そのため英語はコミュニケーションの手段として益々重要になるだろうと話してきた。

今、私は徒労感に包まれている。英語4技能の重要性は2009年の改定学習指導要領に明記された。それ以後全国の中高校の英語教員は4技能をバランスよく学ぶべく授業改革に取り組んできた。積極的に形成的評価を取り入れ、英語で授業をやってきた。

先日ある都立高校を訪問した。年配の一教員が、これからは英語で授業をやれとは言われなくなる、今まで通りのやり方でいいんだと話していた。

結び

かえつ有明中高一貫校の久保敦先生に話を聞く機会を得た。久保先生は国際交流センター長で英語科主任でもある。また、I B研究員もされている。

かえつ有明中高一貫校では、クリティカルシンキングを主眼にした教育課程を組み英語科だけでなく、他教科も交えて教科横断的に展開している。

中学校では教科連携授業「サイエンス」を設定し、図書館司書が中心となり他の教科の先生も交じり、シラバスを作成する。週2回の「サイエンス」の授業でクリティカルシンキングの視点を持った授業を日本語で実施している。

高校に入ったら英語の教科だけでなく、他教科もクリティカルシンキング的思考を育成する授業を展開している。このシラバスで難関大学入試問題にも対応できると久保先生は力強く語っていた。

I Bの目指す「学力」に対応した教育課程であることを認識した。日本の中等教育は着実に変化している。

- 1 『教育委員会月報』平成25年8月「国際バカロレアの普及・拡大について」大臣官房国際課 p12
- 2 『国際的学力の探求』－国際バカロレアの理念と課題－ 西村俊一編 創友社
- 3 問題原文：“The Chinese tribute system and the western powers demands for trade, diplomatic representation and the rights of their citizens were incompatible.” To what extent do you agree with this assessment of the interaction between China and the Western powers during the period 1793 to 1839? (SPEC/3/HIST2/HP3/ENG/TZ0/AO/M)
- 4 『平成24年度大学入試問題分析集』東京都教育庁指導部発行 p6
- 5 『21世紀型スキルとは何か』松尾知明著 明石書店
- 6 『朝日新聞』2020年11月1日 朝刊